

最優秀賞

大好きな海のために

西野町小学校四年 若杉小夏

今年も耳のおくがビリビリするぐらいセミが大きな声で鳴いていて、私は暑くて暑くてたまらずにお父さんに「ねえ、どこかすずしい所つれていって。」

と言いました。お父さんが

「おう。明日、海に行くぞ。」

と言ったので

「えー。海、暑いしやけるじゃん。」

と、いつもお決まりの返事をしました。

「暑い夏だからこそ海の風を感じに行くのがいいんだ。」

と、お父さんもいつもと同じ事を言いました。文句を言っても、本当は海に行くのが好きなので、私はさっそくじゅんぴにかかりました。

次の日、私たち家族とお父さんの友達家族とで海へいきました。貝がらをひろったり、砂で水路を作って遊んだり一日があつという間にすぎて帰りの仕たくをしていると、お父さんたちが海辺から何か持ってきました。

「何それ」

と聞くと、

「あつちに落ちてたゴミ。」

と言いました。遊ぶことにむ中で気がつかなかったけど、周りを見ると、ペットボトルやビン、ふくろなど、いろいろなゴミがたくさん落ちていました。そのゴミを見て私は、だれがすてたの、最悪、と思っただけでお父さんがゴミを拾ってきたことに、特に何も思いませんでした。

その何日か後にたまたま見ていたテレビで、ゴミの海になってしまった外国の海を見ました。最初はフィクションだと思いました。だけど、この海は作り話でも何でもなく、今この世界のどこかで本当に起っていることだとわかって、とてもびっくりしました。その海には、プラスチックのフオークやスプーン、ペットボトル、こわれたボール、歯ブラシなど、私たちがよく使うものばかりがゴミとして流れていました。お母さんにこのゴミがどうなるのかたずねると、

「プラスチックだからねえ。どうなるのかな。ちよつといつしよに調べてみようか。」

と、パソコンをじゅんびしました。さっそくインターネットで、「ゴミの海」を調べてみました。すると、テレビで見たときと同じようなゴミの上に、船がういている海の写真が出てきました。

「すごいね。」

私とお母さんは、思わず言っていました。

海に大量にあるプラスチックのゴミを、魚やカメ、クジラや海鳥たちが、えさとまちがえて食べてしまい死んでしまうと書いてありました。また、プラスチックは体に良くない成分が入っていて、魚やそれを食べる私たち人間にまでけんこうひがあるとも書いてあり、とてもショックでした。そして、もっとショックだったのが、プラスチックは、人工的に作られたものだから自ぜんには帰らないということ、また、いったん海に入ってしまったゴミははずんだり、小さくなったりしているから、全てをなくすことができないということです。私は心配になって、

「じゃあ、このまま海はどんどんゴミだらけになっていくの。」

と聞きました。お母さんは、

「海でゴミは作られないでしょ。海にゴミが流れないようにしたらいいんじゃないかな。」

と言いました。それで私は、この前海に行ったときのことを思い出しました。あのとき、私はゴミを見てきたないと思っただけだったけど、お父さんたちは、自分たちの出したゴミじゃないのに拾って持ち帰りました。

「お父さんはゴミの海のことを知ってたのかな。」

私は、お父さんのしていたことが気になって少しドキドキしました。仕事から帰ってきたお父さんに、このことを聞きました。

「サーフワンハンドのこと。」

と、お父さんが言いました。私がふしぎな顔をしていると、

「サーフィンをして帰るときに、かた手にゴミを一つ持って帰る運動のことだよ。なんでそんなこと気になったの。」

と言いました。私はテレビで見たこと、インターネットで調べたことをお父さんに話しました。

「けつこう前から問題になっているんだよ。あれはひどいよね、だけど、クリーン活動にさんかできない人でも、海に行ったら、きれいな海で遊ばせてもらったことに感しゃして、一人一つずつゴミを持ち帰れば大きな力になるよね。」

お父さんたちは、前からゴミの海のことを知っていて、ずっとサーフワンハンドをしていたんだと知って、びっくりしました。私も、海に行くときは、これからもずっと大好きなきれいな海を守るために、自分の出したゴミだけでなく、ゴミを見つけたら「キッズワンハンド」で、子どもの私でもできるお手伝いをしたいと思いました。